

50. トガリチャバネセセリ *Pelopidas agna*  
西表島白浜林道〔10-11,1ex.〕。
51. イチモンジセセリ *Parnara guttata*  
石垣島バンナ岳〔10-9,1ex.〕，竹富島〔10-12,1ex.〕。
52. ユウレイセセリ *Borbo cinnara*  
石垣島バンナ岳〔10-9,1ex.〕，竹富島〔10-12,2exs.〕。

## 石垣島蛾類採集談

谷田昌也

蛾の採集，特に灯火採集を主な目的とした，いわゆる遠出をする場合，我々蛾屋にとって最も重要なのは，「よい宿」に泊まることである。泊まる宿の善し悪しに，その採集行の成否がかかっているといっても過言ではない。

では，「よい宿」とはどういう宿なのか。まず，その宿が，その場で灯火採集のできる場所にあるということである。繁華街の中のビジネスホテルや田んぼのまん中の民宿などでは，いくら蛍光灯を何本点けても蛾は寄って来ない。山の中の一軒宿や溪谷沿いのひなびた温泉などがよいわけである。

しかし，その宿がどんなよい場所にあっても，我々の泊まる部屋が問題である。概して，我々蛾屋は，アルコール片手のいわゆる御座敷採集を好むから，泊まる部屋は採集に適した部屋，つまり，窓を開ければ蛾の飛びこんでくるような部屋が必要となってくる。おまけに，見はらしのよいベランダなどがあって，そこに白布がセットできればOK。これなら少々気温が下がろうが，雨が降ろうが大丈夫。部屋で一杯やりながら，白布に蛾影が映ったときにベランダに出るという優雅な採集ができるのである。したがって，そのためには，前もってそういう部屋を予約しておかねばならないことになる。

だが，これでも万全というわけではない。「よい宿」として最も肝心なのは，宿の主人が，我々蛾屋に理解があるということなのだ。女子大生向けのペンショ

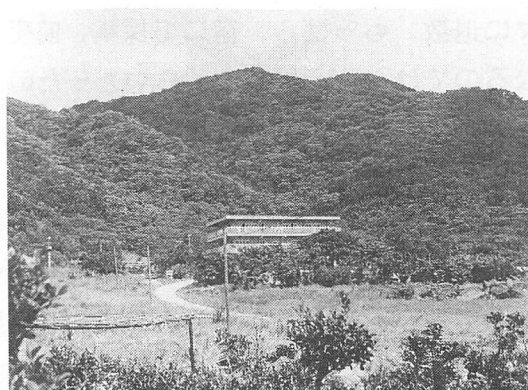
ンなどは問題外としても、夜間、宿の電気を一杯使って、畳の上を虫だらけにでもすれば、たいていの宿は嫌な顔をする。「きれいなのが来るのですね」とか、「ご苦労さまです」といってくれる宿でなくてはならない。この決定的な条件を満たさない限り、楽しい採集行とはならないのである。

さて、前置きはこれくらいにして、筆者は、1986年10月9～12日、関西蛾屋サロン「炎舞」のメンバーである緒方正美、木下総一郎、金野晋の各氏と石垣島にて、灯火採集を行った。石垣における「よい宿」は、名蔵にある豊川荘である。名古屋のA氏と懇意のこの宿は、緒方先生も以前に泊まれたことがあるとのこと。

10月9日15時すぎ豊川荘着。筆者にとっては、今回が3度目の石垣であるが、前回来たのが1982年の3月であるので、約4年半ぶりということになる。大阪から予め送っておいた2台の発電機の安着を確認し、パインジュースで一息。

まず、宿のベランダに、「主」とばかりにいすわっていたオオジョロウグモに気を遣いながら白布を張った。次に、野外での灯火採集の場所を捜すべく、レンタカーで出発。崎枝の集落からブザマ岳に登る林道（以下、ブザマ林道と略す）に、なかなかよい場所があり、そこに白布をセットした。さらに、屋良部半島へ続く道の途中の見晴らしのよい地点にもセット。かくて、第1夜は、宿を含め計3カ所での灯火採集となった。この夜は、天候もなかなか蛾日和（高温・多湿・無風）であった。屋良部は場所が悪かったせいも、シンジュサンくらいしか来なかったが、ブザマ林道では、フリッツエホウジャク、ナカジロフサヤガ、ヒロオビキシタクチバなどが、豊川荘では、ネウスシャチホコ、キバネヘリグロクチバ、サンカククチバなどが採集できた。蝶ではスジグロカバマダラが普通種であるように、蛾の方もファウナが本土とまったく異なるので、キシタヒトリモドキやシロスジヒトリモドキといった普通種でもおもしろい。幸先のいいスタートに、みんなも「やっぱり南はいいね」と顔がほころぶ。多数の蛾とともに、各種のコガネムシやヤエヤマノコギリクワガタも飛来。カミキリもイツホシシロカミキリ、フトガタヒメカミキリなどが集まってきた。そして、そのなかにハイイロツツクビカミキリという珍品も含まれていた。これは、筆者のような門外漢には、スカみみたいなカミキリであったが、カミキリ屋によるとたいへんな記録らしい（詳しくは、友人の北山昭氏によって、月刊むし194号に発表された）

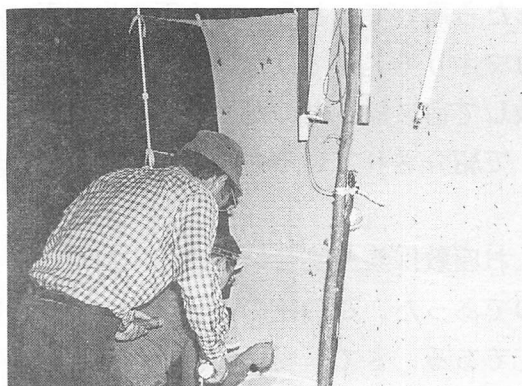
翌10日の午前中は、天気もよかったので、海水浴もかねて屋良部半島へ採集に



蛾屋の宿，豊川荘の遠望



豊川荘に設置した灯火採集のセット



ブザマ林道での夜間採集



ブザマ林道での昼間の採集

向かった。蛾屋とはいえ，みんな元々蝶屋（金野君はヘビやムカデまでやる何でも屋）。よって，昼間も当然，採集に励む。しかし，夜遅いこともあって，ゆったりとした採集。同じ日程で石垣・西表島を回られた谷角氏らの強行軍とは大違いである。常にゆとりのある採集。これが蛾屋のモットーなのだ。牧草地でアオタテハモドキなどを採集しながら海岸へ。この日は気温が30℃近くあって，遠浅の海で泳いだり，砂浜からツノメガニを掘り出して遊んだり．．．西表の島影を見ながら浜にねそべっていると，今の平均的日本人が，いかに貧しいかを痛感する。しかし，多くの日本人はそのことにすら気付かずに，毎日，夜遅くまで働いているのだが。

それはともかく，午後からは天気が崩れ，新しい灯火採集の場所を見つけるべく，於茂登方面に行こうとしたが，雨が降りだして断念。高田植物園で「八重山そば」を食べて宿に戻る事となった。夜になっても天気は悪く，前夜のブザマ

林道にセットはしたが、強風のため早々に退散。もっばら、宿にて採集。前夜は、この調子なら持ってきた三角紙がなくなるのでは、と心配したくらいだったのだが。それでも強風について、ミドリスズメ、オバナワスズメ、キオビアシブトクチバなどが飛来。結局、深夜まで頑張ったのだった。

3日目の天気は悪く、昼間の採集は全くできず、石垣市内に出ておみやげを買ったり、喫茶店に入ったりする始末。夕方になっても風は強く、この夜は、ブザマ林道もあきらめ、宿の近くの林道の途中でセットした。しかし、見はらしも悪く、ワイルマンネグロシヤチホコが来た程度。ただ、そろそろ帰ろうかと言っている時、ハチらしきものが1頭飛来。筆者曰く、「あ、これ、ひょっとしてスカシバちゃいますか?」「アホか、刺されたら痛いぞ」と言って木下先生が毒びんに。よくみるとハチではない。なんとカマキリモドキではないか! 蛾屋の目も惑わすすばらしい擬態ぶりに、一同、感激して宿に帰ったのだった(このカマキリモドキは、奥本大三郎編『珍虫と奇虫』で紹介されているものと近縁のものと思われる。標本は木下氏所蔵)。

この夜は、本会の谷角氏らと合流し、お座敷採集+宴会。8人の虫屋が、ワイワイガヤガヤと遅くまで泡盛を飲んだのであった。この夜の様子については、いずれ、“混蟲ずかん”に紹介される予定である。さて、収穫の方は、前夜同様の悪天候のため、いまひとつではあったが、それでも、アトアカヒトリやオキナワモンシロモドキなどが採れ、アルコールのせいも、毒ピンを2本も割ったりしたが、とにかく楽しい夜であった。

翌日は石垣最後の日。帰りの飛行機まで時間があつたので、午前中、前日灯火採集を試みた近くの林道にて昼間の採集。この林道は、蝶が豊富で、ルリウラナミシジミ、ヤエヤマイチモンジ、コノハチョウ、ミカドアゲハなどを採集。蛾でも、木下先生がセセリモドキを、筆者がアオツバメを採集するなど、短時間でなかなかの成果を上げた。昼すぎ、宿に戻り昼食。この日は天気がよく、宿のベランダからコバルトグリーンの名蔵湾を眺めながら、また来年来るぞ! と心に決め、帰路に着いたのだった。

なお、今回の採集行の詳しいデータは、まとまりしだい発表する予定である。また、本稿の初めに触れたような「よい宿」をご存じの方は、筆者まで御一報いただきたい。